

医療福祉建築賞 2021 を受賞しました



当院は医療福祉建築協会 「医療福祉建築賞 2021」を受賞し、4月28日に表彰式が行われました。

医療福祉建築賞は、優れた医療福祉建築を顕彰し、それを広く世に知らせることによって、これらの施設の質の向上をはかることを目的として定められております。優れた医療福祉建築とは、建築として質が高いことに加えて、利用者側ならびに職員側にとって快適で使い勝手がよいことを条件とする。すなわち中身と器が調和し、いずれにおいても優れていることを意味するものであります。

当院が受賞した理由としまして、「これからの病院のあるべきモデル・規範になりえる病院」という基準で選定されております。特に肥大化させないコンパクトなつくり、高齢化配慮の病棟、患者のみならず職員にも選ばれる環境、高い防災性と省エネ性能といった点が高く評価されました。



高知赤十字病院

Japanese Red Cross Kochi Hospital

～50年先の地方中核病院の新たなモデルをつくる～



+ 空間計画

人口減少時代でも、患者と働き手に選ばれる環境づくり

豊かな採光と眺望を確保した開放的な待合空間と、分かりやすくコンパクトな動線計画。また、医療の垣根を解消する執務室のワンルーム化や、多目的スペースの充実による快適な職場環境の整備。

病院の様々な領域における縦割りの境界や、構造的な垣根を問い直し、可能な限り一体化させ、融合化を図ることによる、新たな価値を創出した。

迎える場の演出

メインエントランスは華美で広大な空間とせず、コンパクトで家庭的なスケールの導入空間を目指した。外来を中心とした2階のメインフロアにスムーズにアクセスできるよう、エレベータと階段を中心に配置した明快な動線を確保し、インテリアは高知らしい木質系の素材を活かした意匠デザインとしている。

また、来院者が気軽にくつろげる家具や、高知の染め物伝統工芸である「フラフ」をアートワークとして設けるなど、訪れる地元利用者にとって親しみのある『高知らしい』迎える空間となるよう工夫を施している。



フラフ



エントランスホール



ベーカリーカフェ



外部待合



待合空間



救急入口

心地良さを感じる「待合」デザイン

メインフロアとなる2階の外来・検査部門の待合空間は、南側全面の眺望と自然光を確保した一体的な空間とし、待ち時間の負担を和らげる開放的なデザインとしている。

外来各ブロックの中に中待合を設け、診察直前の患者が診察を落ち着いてマテルスペースを設けた。

検査前後の待合や図書利用の目的など、様々な待ち方に配慮した家具を選定し、誰もが心地よく過ごせる演出を施した。

感染対策にも配慮し、南側に隔離できる陰圧設備のある専用安心・安全な待合を計画した。



総合受付



2階待合より外部空間を見る



外来待合

働きがいのある職場空間の充実



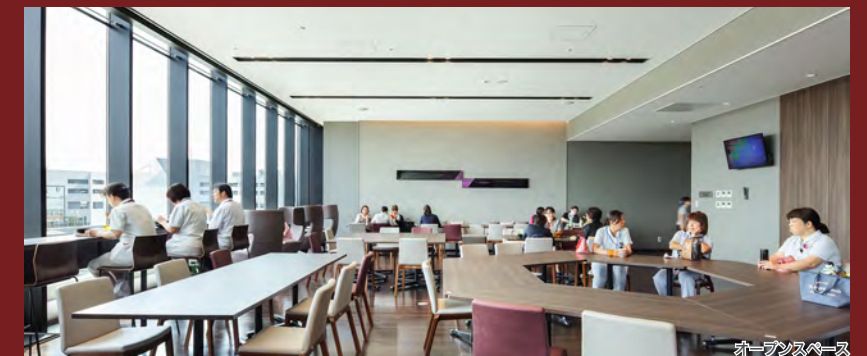
4階医局内会議室



4階医局内ラウンジ



4階医局



オープンスペース

業務・執務環境の効率化を図るため、事務管理エリアは4階のワンフロアに集約し、高いセキュリティが確保された職員専用フロアとして計画されている。

全体としてコンパクトなフロア内に、ゆとりある業務スペースを整備するため、更衣・休憩スペース等は集約して確保、医局・看護・事務を、極力間仕切りを設けないワンルームにするとともに、室内の部門間は必要に応じて家具・什器やブース・パーティションで仕切り、将来的な変更に対する自由度と可変性の確保する計画とした。

また、職員フロアには災害時の活動拠点となるホールとともに、職員専用のオープンスペースを確保、ホールと一体的な利用が可能な計画とし、下階の厨房とダムウェータで直結することで、職員の食事スペースや休憩に使われる他、ミーティング等の多目的に対応できる空間とした。

+ 病棟計画

急性期の高齢化を踏まえた特性を優先した病棟計画

病棟各階には、専用のリハビリ室や、多職種の病棟ケアに利用できる多目的室、夜間せん妄患者の観察室など、病棟ケアの視点による諸室を充実させ、静粛性や眺望確保による快適な環境に配慮した病棟を実現。高知県で初となる女性フロアを計画し、病棟内には専用のパウダーコーナーやシャワー室等のアメニティを整備し、女性入院患者のニーズに応える環境を実現。

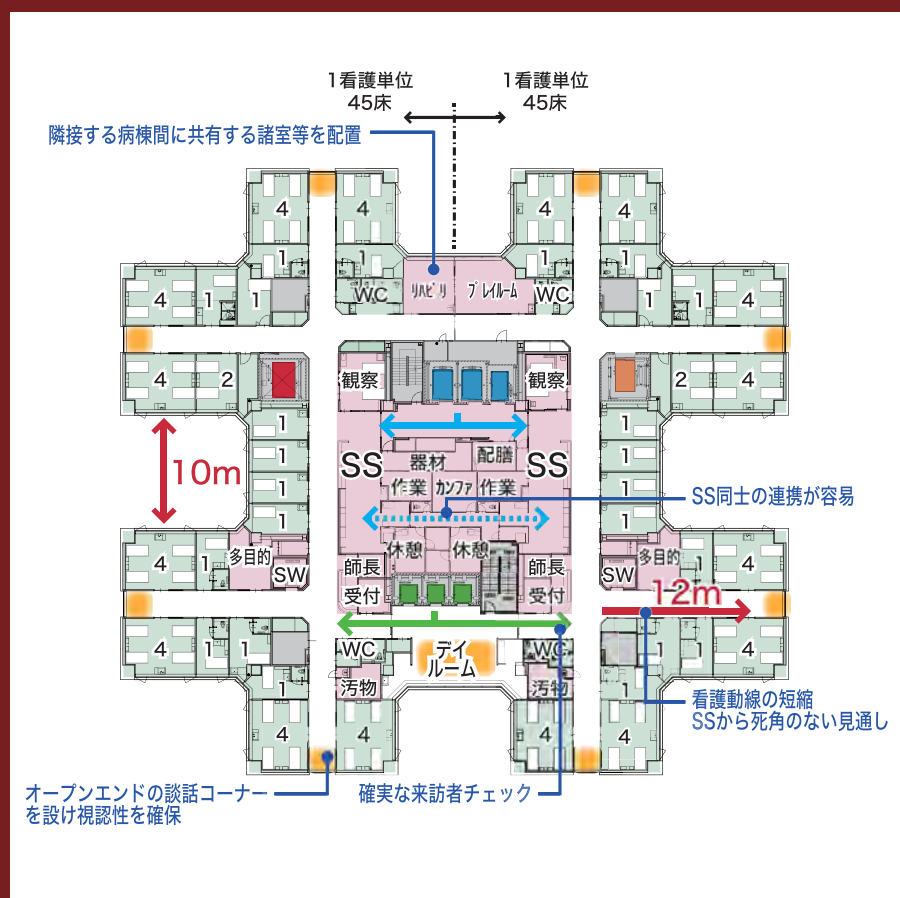
スタッフの作業効率と看護動線に配慮した病棟計画

病棟は、共用廊下の面積を最小限に抑えることができる井型病棟を採用、スタッフステーションの周囲を取り囲む病室配置とすることで、看護動線を大幅に短縮する平面計画とした。

4床室内にトイレは設けず、廊下のコーナー部に多機能トイレを複数配置し、全体面積の効率化を図る。

観察室（処置室）や重症室（1床）はスタッフステーションの前に配置することで、スタッフの近接化・観察性に配慮した計画とした。

面積効率を図る一方で、病棟専用のリハビリ室や家族面談にも使える広い多目的室など、これからの急性期病棟に必要な諸室を全ての基準階に確保する計画としている。



病室 (4床室)



ティールーム

患者の療養環境に配慮した施設づくり

病棟内は廊下からスタッフステーションまでタイルカーペットを採用した静かな病棟環境を目指すとともに、間接照明を中心に照度を控えめに抑えながら、廊下の各端部から明るい自然光と緑の眺望を確保できる快適性の高い入院環境を目指した。



病棟廊下端部より景色を見る



スタッフステーション



病室 (病棟)

高知県初となる女性専用フロアの整備



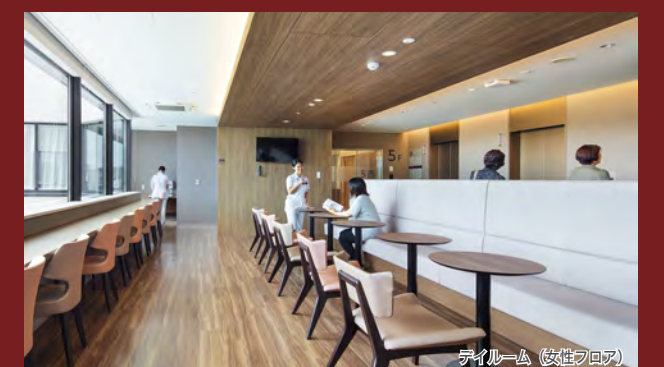
パウダーコーナー



スタッフステーション (産科病棟)

高知赤十字病院の強みでもある産科病棟は、高知県域で初となる女性専用病棟に隣接して配置し、女性専用フロアとして整備されている。病棟への入室自体を女性のみ限定し、セキュリティをかけている。病棟内は専用のパウダーコーナーやシャワー室などのアメニティを整備し、女性入院患者のニーズに応える環境を整えている。

色調も一般病棟と差別化を図り、淡いルージュ色を基調とした内装とし、女性らしい空間を演出した。



ティールーム (女性フロア)

+ 新モデルとしての設計上の工夫

地方都市における「医療提供の持続性」を担保する病院建築の一つの解を目指す

長期的な過疎化と高齢化が進行する地方都市において、安定した医療提供の維持のためには、病院経営と施設管理への負担軽減と、病院に求められる真に必要な機能の充実が不可欠である。

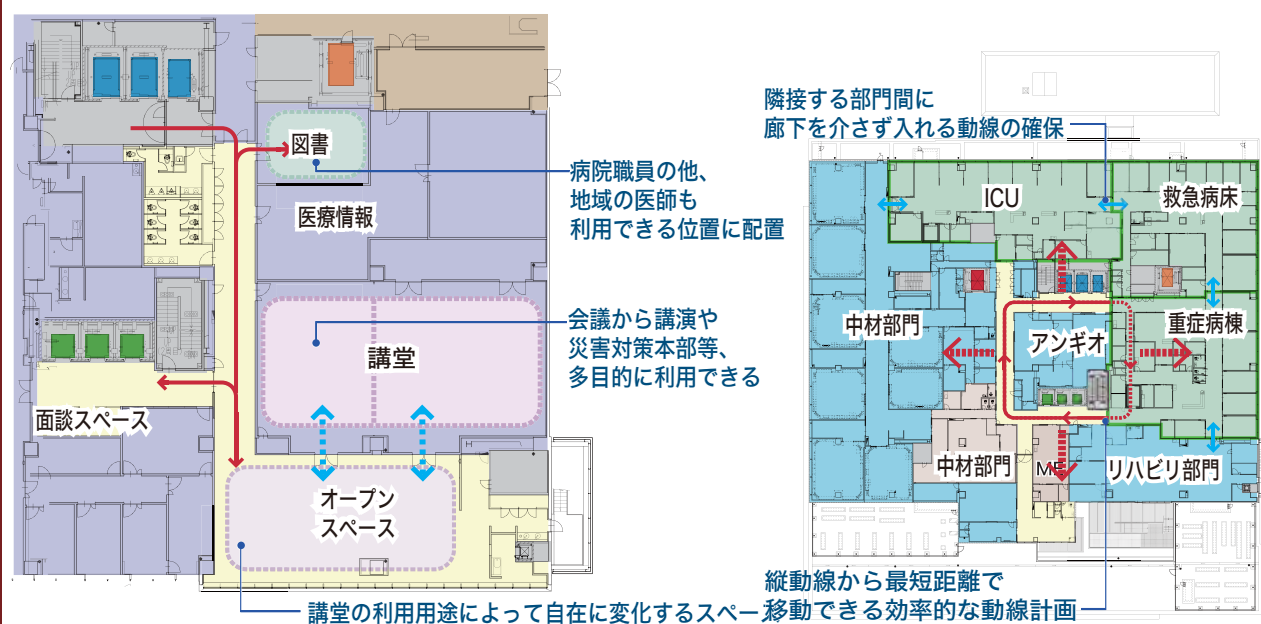
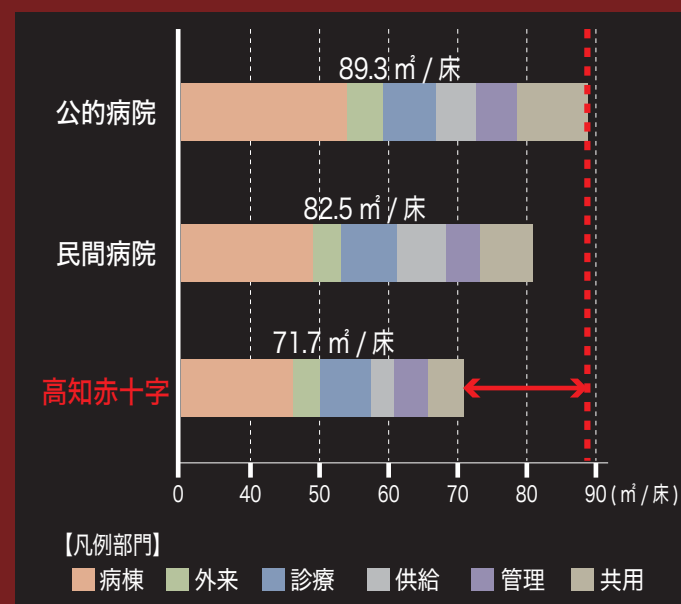
新たな高知赤十字病院は、人に優しい建築環境と高い経済効率性を実現すると共に、中長期的な建築の持続性を見据えた、高い防災性能と環境性能を備えた病院のモデルを目指している。

『効率性』 メリハリのある構成による「医療の質」と「面積効率」の両立

全体の床面積をコンパクトに抑えながらも、必要な診療機能は充実させ、エレベーター等の縦動線を中心に放射状に展開させた部門配置計画とすることにより、移動距離の短い効率的な動線計画を実現している。

近年、公的医療機関の床面積規模は増加傾向にある中、新病院では医局・看護・事務部門のワンルーム化、休憩等の共用スペースの集約化等、スペースの整理と削減を徹底した結果、共用部門を全体面積の7.5%まで縮減し、供給系面積も大幅なスリム化を図った結果、全体面積で1病床当たり71.7㎡の面積効率を達成した。

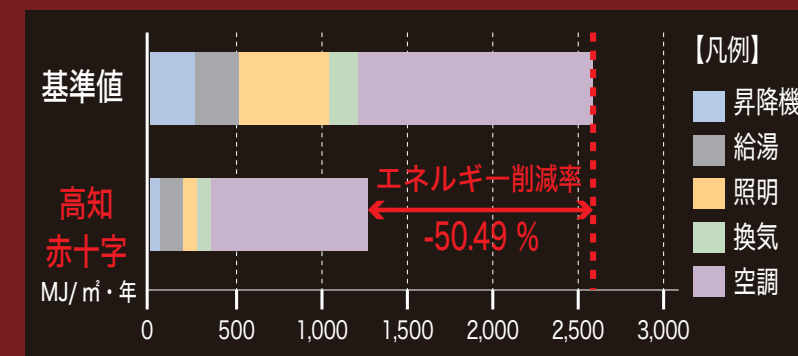
床面積規模は、即ち建設費用と維持管理費に直結することから、新病院では面積効率を最大化し、長期的な医事負担の低減を図ることで地方都市型病院のあるべき姿を提示している。



『環境性』 大規模病院では日本初となる「ZEB Ready」の環境性能の達成

建物外皮の高断熱化、LED照明の自動センサー制御、空調換気設備の効率化と制御、マイクロコージェネによる発電と排熱の活用等により、400床クラスの病院では国内初のZEB Readyの認証（建築物省エネルギー性能表示制度（BELS））を取得した。

採用技術を厳選し、光熱水費の削減によりLCCを低減し、低炭素化に貢献した病院を目指した。結果として年間維持費の大幅な削減を可能にした。



『安全性』 対浸水強化型のBCP建築

東南海で予想される大型の地震災害や大規模の水害時下でも病院機能を維持できる病院を高知赤十字病院は期待され、部門配置にも配慮した構成となっている。

1階には迅速な対応が求められる高度救命エリアを配置。それ以外の病院機能を支えるエネルギーや給食、薬剤などの供給機能や管理機能、病棟エリアを含む病院の基本機能はすべて地盤面から浸水の影響のないフロアに配置し、予想を超える水害による地上階の完全水没時にも、病院機能を保持する階層構成とした。津波やゲリラ豪雨などの、水害が生じた場合に備え、一階床レベルを周辺地盤より50cm高く設定した上で防潮版も設置している。

ライフラインの自立確保として、通常のBCPで計画される建物より継続可能時間を長く、細やかに設定し、災害により万が一孤立した際にも万全の対策を施している。

